バナナ

八十六

獅子文六

中央公論社

全音楽譜出版社承認済

バナナ©

著　者　獅子文六

昭和34年12月10日印刷
昭和34年12月15日発行

発行者　栗本和夫

印　刷　凸版印刷

発行所　中央公論社
東京都中央区京橋2の1
電話(56)5921～30
振替東京34番

定価300円

バ

ナ

ナ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

クレとゴ

新式な洋間にはちがいないのだが、明るい反射を期待してる壁面に、草色のドンスが張ってあったり、パイプ脚のイス・テーブルの背後に、ラデンの輝く書棚が控えていたり、安井曾太郎の静物の隣りに、康有為の聯が下っていたり、何か、トンチンカンな居心地である。しかし、室の中は、ユンケルの大きな石油ストーブで、汗が出るほど暖められ、広々とガラスを用いた南面から、朝の光が豊かに射し込み、街の雑音も、あまり耳立たないから、東京の冬の住居としては、快適の方であろう。

テーブルの上には、食べ荒らした朝飯の食器が、そのままになってる。中央の大丼にカユの残汁がよどみ、カラシ菜の油いためや、赤い豆腐や、色のよくない漬物なぞが、大皿小皿の中に、わずかな影を留めている。

恐らく、そんな食物を、タラフクつめこんだと見えて、厚地のパジャマも破れんばかりに、大きな腹をつきだし、行儀悪くイスにのけぞりながら、新聞を読んでる男は、かきあげた頭髪が、薄くなってはいるが、体重二十二貫——いや八十二キロ以上はありそうな、福々しい人物である。しかし、眉毛が太く、眼玉が大きく飛び出し、厚い唇がへの字に結ばれた人相は、なかなか大規模であって、近頃の日本人には珍らしかった。まず、大藩主とか、豪賊の面がまえであって、人は畏敬するだろうが、よく見ると、ガタガタ普請のような、気安い点がないでもない。大きな眼玉も、新聞の活字を追いながら、トロンとして、視線もさだかでなかった。といって、居眠りをしているのではない証拠に、時

時、ゲーッと、すばらしいゲップの音を、立てるのである。
その向側に、黄色ッぽいウールの茶羽織を着て、レースのようなものを編んでる細君は、美人ではあるが、顔が小さく、鋭く、細い首に青筋を浮かしている。皇族のように、面高かで、なで肩で、その上、姿勢を正してるから、大変、品がいいけれど、眼つきだけは、料亭のオカミのように、スキがない。まだ、四十を越したか越さぬかと見えるのに、右の額ぎわから、ハケではいたように、一流れの白髪が見える。その他の部分は黒々として、そのシラガの部分も、端の方は美しい茶色を呈して、三段のシブい色調を誇っているのは、天然現象とも思われなかった。
彼女は、さっきから、良人(おっと)が大きなゲップを放つ度に、眉を動かしていたが、それよりも気にさわる対象を見出した。
「いやだわ、まだ、ハイがいる！」
一疋の冬のハエが、室の暖かさに活動を始めて、食べ残しの皿の上を舞っていた。女中さんが、いつまでも下げにこないから、こんなことになるのである。
「あら！」
ハエは、ついにカユの丼に飛びこむと、残汁に羽根をとられて、バタバタしだした。
細君の叫びを聞いて、良人は静かに顔をあげたが、やがて、太い腕がのびて、ブツリと、ハエをつぶしてしまった。
「まア、きたない。なんてことをなさるの」
細君は、良人を烈しく叱りつけただけでは気がすまず、腕をつかんで、イスから立ち上らせた。
「手を洗ってらっしゃい！」
八十二キロの体重が、何の抵抗もなく、洗面所の方へ移動していくのと、入れちがいに、若い女中さんが現われた。

「あんた、いつも、おかたづけがおそいのね。二人いるんだから、どっちか、手があいてるはずよ」
「一しょに、お食事してました」
「かたづけものが済んでから、お上りなさいよ。グズグズしてるから、お丼にハイが飛びこんじゃったわよ。もう、それ、使わないから、犬の食器に廻して……」
女中がムッツリして、皿小鉢を運び盆にのせ、台所に去ろうとすると、
「龍馬は、まだ、起きないの」
「お坊っちゃまですか、さア……」
「もう、九時でしょう。起して頂戴」
そこへ、良人が帰ってきた。
「よく、お洗いになって？」
「うん」
「消毒しとくと、なおいいんだけど……」
それには答えないで、良人は、またイスにもどって、新聞をとり上げた。
「あなた、龍馬のことですがね」
細君は、イスを寄せた。
「うん」
「この頃、少しヘンだと、お思いにならない？」
「そうさな」
「夜おそく帰ってくるのは、いまに始まったことじゃないけど、この頃は、おそくなり方がちがうと思うの」
「どう？」

「つまり、マージャンやパーティでおそくなるんじゃないらしいの」
「それなら、結構じゃないか」
「逆よ。あたしは、普通の交際以上のことが、始まったんじゃないかと、心配してるの」
「いや、大丈夫だ。あいつは、全学連へは入らんね」
「そんなこと、考えちゃいないわ」
「わからんな、すると……」
「あら、わかってるじゃないの。あの子だって、もう、二十一ですよ。その上、女友達も、大勢いるんですよ」
「だから？」
「恋愛よ、きっと、そうよ」
細君は、思い余って、そういったのに、良人は、大口を開いて、笑い出した。ひどく重量に富んだ、塩気のきいた笑声である。
「お笑いになることはないでしょう」
「ハッハハ」
「あなたは、どうして、そう不真面目なの。たった一人の息子が、恋愛を始めるとなったら、あたしたちの大事件よ。少しは、ご自分の若い時のことを、考えてご覧なさい……」

少しは、自分の若い時のことを、考えてみろ、といわれて、良人は、キョトンとした顔をしたが、これは、今に始まったことではない。
細君は、年と共に、その誤解を深めていくようである。今では、抜くべからざる信念となってるようだが、彼としても、何分、昔のことであるから、ハッキリしたことはいえないにしても、彼等が夫

婦となった動機が、彼の方からモチかけた恋愛ではなかったと、断言できるのである。その経過も、格別のハナバナしさはなかったと、記憶するのである。しかし、細君の方では、あだかも、二人の結びつきに、大恋愛があって、あらゆる周囲の反対と戦い、やっと一緒になったと、思ってるばかりでなく、その恋愛の火つけ役は、彼であって、彼女は、熱情に圧倒されて、焔を燃やすに至ったのだと、信じていないと、どうも、世の中が面白くないらしいのである。

「そう思いたければ、そう思わしとくだけのことだ。わたしの方では、どっちでも、一向、差支えないのだからな」

ただ、最近、細君の幻想が、よほど昂進してきて、何かにつけて、過去を装飾したがるのは、迷惑というよりも、彼女の変調として、気がかりでないこともない。四十代になって、女が恋愛の再評価なぞ始めるのは、穏当といえないのである。

一体、彼が細君の紀伊子と結ばれたのは、シナ事変の起った年だから、二十何年もたっているが、彼女と知り合ったのは、それより五年ぐらい前で、彼女は、まだ、四ツ谷のF女学校の下級生だった。彼も、神田のM大学へ、毎日、国鉄電車で通うので、一緒に家を出ることもあったが、友達と会っても、誰もからかう者がなかったほど、紀伊子は、子供っぽかった。

彼は、呉天童といって、台湾人であり、その頃は日本国籍を持っていたが、実質的には、異国の留学生だった。尤も、中学時代から、東京へきていて、その学校の寄宿舎へ入っていたが、M大学へ進むと共に、日本人の良家の風に浴せよ、という父の命令で、千駄ヶ谷の紀伊子の家に、食事付きの部屋借りをすることになった。

紀伊子の家は、浅草橋で油問屋を営み、千駄ヶ谷の住宅も、相当の普請で、父親が存命だったら、台湾留学生を下宿させることもなかったろうが、母親と二人暮らしになってから、その家と地所が唯一の財産という運命に落ちて、呉天童との繋りを生じたのである。

呉天童は、まったく、手のかからない下宿人だった。何を食わしても、どんな扱いをしても、少しも文句をいわないし、その上、台湾の生家が富んでいるから、下宿料以外の付届けもあった。母親が、先ず、彼に好意を持った。紀伊子は、最初、彼をバカにしていたのだが、女学校卒業前になって、突然変異を起した。

原因といえば、彼女が親しい同級生と、口論したことからなのだが、その友人は、卒業すると、すぐ、許婚者の毛並みのいい青年と、結婚する予定だった。

「あたし、そんな結婚、絶対反対よ。あたしは、自分で選んだ、自分の好きな人でなくちゃ……」

「じゃア、どんな人？」

「男の中の男よ」

行きがかりで、彼女も、飛んだことを口走ったが、そんな男が、この時代に、ザラに見当るわけもなかった。しかし、友人の幸福にヤキモチが半分としても、後の半分は、真剣な幻でもあった。一種の思春期現象かも知れないが、紀伊子は、ニキビ大学生とか、チンピラ会社員なぞが、不潔で、コセコセして、メメしくて、ひどく反感をそそられたが、それとはまったく反対の男が、必ず出現することを、疑わなかった。その代り、その男が、どんな階級の生れであれ、どんな無教育の男であれ、敢えて辞さないというよりも、むしろ、そんな男である方が、注文にかなった。気性の烈しい娘が、家運の没落に会うと、そんなことを考えるのであろう。

しかし、男の中の男というむずかしい第一条件に、たまたま呉天童が当選したのは、奇妙であった。彼が手近かにいたことは争えないが、怠け者で、粗忽家で、食いしん坊で、金儲けの才覚を知らず、立身に興味がなく、しかも、台湾人である男に、まだ十八歳の乙女の方から、烈しい想いをささやいたのだから、普通ではなかった。ただ、容貌だけは、呉天童も、西郷隆盛を近代化したような偉相であって、体格もそれに準じていた。看板だけは、男の中の男であった。そして、彼が台湾の生れであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ることは、紀伊子にとって、何の障害でもなかった。彼が日本の国内で生れていたら、彼女も、夢の描き方に制限を受けたにちがいない。

とにかく、二人の結婚は、彼の方が受けて立ったのが、真相であって、現在、彼女が考えてるような、ハナバナしいものではなかった。尤も、台湾人と結婚するということで、周囲の反対があり、彼女がヤッキとなって闘った事実はあるが、それも、大恋愛の波瀾というほどのものではなかった。

二人は東京で結婚したが、披露式は台湾で行われた。紀伊子も、赤い絹の花嫁服を着せられ、三日間も宴会が続いた。その頃は天童の父も存命で、商売は栄えていた。

しかし、天童は、間もなく、家業をつぐ意志のないことを明らかにし、日本で生活したいと告げた。父親は自分が無学であったから、息子を日本の大学に学ばしたのだが、もし天童が日本で官吏とか、学者とかになるならば、彼の望みを許すといった。天童は、日本へ帰りたい一心で、直ちに承諾した。そして、呉商行の後継者は、弟の天源ときまったが、彼は兄とちがって、商人に生れついたような男であり、決して人情家でもないのに、位を譲ってくれた兄を徳とし、今もって、報仕を忘れないのである。

呉夫婦は日本へ帰って、千駄ヶ谷の紀伊子の家を、彼女の母から買い受け、そこに住み続けたが、天童は、父親と約束したように、日本で官吏にも、学者にもなる様子はなかった。もともと、紀伊子の異国趣味も、台湾人の義父母と共に暮らしたいほど、強烈ではないことを、天童もよく知っていたし、彼は彼で、日本にいなければ充たすことのできない欲望を持っていたから、故郷に留る気がなかったのである。

彼は少年時代から東京で暮らしてる間に、すっかり食いしん坊になってしまったのである。うまいものを食う時ほど、人の世に生れた甲斐を感ずることはなく、それも、食通といわれるような味覚の

批評家ではなくて、自分の好きなものを、ガキのように、むさぼり食うのが、無上の愉しみだった。そして、生国の中国料理は勿論のこと、日本料理も懐石料理からウナギ、てんぷら、すし、おでんに至るまで、どんなものでも好きであり、また、フランス料理も、日本式洋食も、トンカツまで大好物で、要するに、何でもござれの食いしん坊なのだが、自分でウマいと感じた店のものでなければ、見向きもしない見識は持っていた。だから、なまなかの日本人より、彼は東京の和洋料理店を知っている。そして、世界中の都で、東京ほど、食うことに恵まれたところはないと、思ってる。洋食だって、洋行する必要がないほど、各国の料理が食べられるし、日本食は関西料理、長崎料理、秋田料理まである。そして、大小の料理店の数の多いことといったら、これまた世界一で、銀座、新宿、渋谷へ行くと、食べもの屋でない店を探す方が、骨が折れる。

東京は、天童にとって、天国であり、台湾からの仕送りで、働かないで、うまいものばかり食う生活を続けるうちに、紀伊子が男の子を産んだ。天童は、天龍と命名したかったのだが、紀伊子は相撲取りの名のようだといって、真向から反対した。そして、龍馬という名に落ちついたが、その頃の日本の空気からいって、その命名は賢明だった。彼の姓でも、呉をゴといわずに、クレと呼ぶ方が、利益のある場合が多かった。

龍馬が四歳を迎えた時には、大東亜戦争の中期だったが、天童は逸早く、台湾へ疎開した。食物の都東京に食物が欠乏しては、無意味であり、台湾はまだ豊富なことを知ったからである。

終戦後一年経って、彼は妻子と共に、東京へ出てきた。もはや、彼は日本人ではなくなっていたが、戦後の東京では、その方が住みよく、クレよりもゴとして、第三国人の利益にあずかった。尤も、彼としては、戦前だって、自分を日本人だとは思っていなかったし、現在も、台湾政府に愛想をつかしてると同時に、中共政府を少しも信用する気になれないから、具体的な中国人意識の持ちようがなか

天童夫婦が[illegible]のノとなったのは、結婚後十年目だったが、夫婦も十年一緒になってると、たいがい気ごころも知れると共に、良人として、また妻としての値打ちもわかってくるもので、紀伊子も、どうやら、男の中の男へ嫁いだというのは、錯覚だったと、思うようになっていた。朝から晩まで、ゴロゴロしていて、ウマいものを食う工夫ばかりしてる良人は、

「豚の中の豚よ」

と、罵りたくもなるが、それを口に出していえないのは、彼女も、買いかぶりの罪が自分にあるのを知ってるし、そして、追々に、世間がわかってくると、男の中の男なんて、オバケよりも存在の怪しいものだと、アキラメがついてくるからでもあった。それに、天童は男の中の男ではなかったにしても、良人として、寛大この上もなく、ヤキモチもやかず、とりたてた浮気もせず、結構な旦那であることが確実で、別れたところでトクはなかった。

ところが、戦後三年目ぐらいに、天童は弟の天源の入れ知恵もあったが、どういう風の吹き廻しか、生れて始めて商売というものをやって、大金を儲けたのである。その頃は、第三国人が濡手に粟のつかみどりをやって、誰も儲けた時代だが、天童は台湾の弟から送ってくる物資を売り、日本から薬品や機械を送り、往復貿易で儲けたが、その金の全部を、東京の地所買入れに注ぎ込んだのが、当ったのである。その頃は、台湾と通商協定もなし、密貿易も公然で、勝手なことができた上に、東京の地価は、タダのように安かった。

彼が商いに乗り出した期間は、二年間ぐらいなもので、その間は、生れ変ったような活動家になったが、正規の貿易が始まる頃から、ピタリと手をひいて、また、もとの徒食生活に返った。しかし、彼の目星をつけた地所は、バカバカしい値上りを見せ、また、台湾の弟も、儲け過ぎて政府に狙われ出したので、神戸へ店を移し、そこを本拠にして事業をひろげ、兄への仕送りを断たないから、天童の家の生計は豊かで、数年前に、赤坂台町に、現在の美邸を新築した。そして、彼の偉相も一層カン

ロクがつき、いつの間にか、新華僑の頭株に、祭り上げられた。新華僑というのは、大陸出身の在日華僑に対し、台湾人の華僑をそう呼ぶのであるが、戦後、その連中が頭角を現わし、旧華僑をしのぐ勢力を持ってきたのである。

こうなってくると、妻の紀伊子も、少し戸惑い始めた。

「ことによると、やっぱり、男の中の男……」

と、最初の鑑定を、思い出したのである。尤も、途中でアキラメたことを、取消すまでには、まだ遠かった。世間では、良人の相場が上ったけれど、家の中ですることを見ていれば、昔と少しだって変らず、豚の中の豚といいたくなる所業も、かなり多いのである。

呉天童も、永く日本に住んでいながら、朝飯だけは、中国風でないと承知ができず、おカユに四川菜は、欠かしたことはないが、その他に、季節の野菜料理一、二品で、いかにもウマそうに、ゆっくり朝の食事を愉しむのが、通例だった。食いしん坊のたたりで、慢性胃炎をわずらっているが、おカユは三杯ぐらい、きっと平らげるのである。

「紀伊さん、空飛ぶ円盤が、日本にも出たらしい。写真とった少年がおる……」

天童は、新聞を見ながら、突然、大きな声を出した。

「どうだって、いいわよ、そんなこと……」

細君は、さっき、話の腰を折られた恨みが、残っていた。

「どうでもよくはない。宇宙旅行ができるか、どうかいうことに、大関係あるからね」

「あなた、月の世界へでも、行きたいの」

「行きたくはない。しかし、行かなくてはならん時がくるかも知れん」

そのような、とりとめないことをいうのは、良人の癖であるから、細君も、対手にならなかった。

しかし、天童は、案外マジメな調子で、
「日本が、北京政府の支配でも受けるようになれば、ぼくには住みにくくなるから、アメリカに逃げるつもりでいたが、アメリカも怪しくなる日がないとはいえんわけだ。すると、宇宙旅行の必要が起きてくるわけではないか」
これには、紀伊子も笑い出した。
「あんた、そんな神経質なところがあるの。頼もしいわね」
「ぼくは、どちらかといえば、そういう気質だね」
「あら、お見それしたわ。ところで、月世界へ行くのもいいけど、今日は、あんた、総社へ行くことを、忘れちゃダメよ。午ご飯の会だったわね」
「今日だったかね」
「そーら、ご覧なさい。きっと、忘れてると、思ったわ」
「あんな会は、どうでもいいのだ……」
天童は、中華民国在日華僑東京総社という長い肩書の会の幹部なのだが、めったに、顔出しをしたことがなかった。今日は、台湾からきた要人の歓迎午餐会があるので、主だった新華僑は、全部、顔を揃えるのだが、彼は日を忘れるほど無頓着だった。中共政治を恐怖するくせに、台湾の方にも、背を向けてる男なのである。
「いらっしゃらないの、じゃア……」
「なるべくな」
「行かないなら、行かないで、さっきの龍馬の問題を、ゆっくり相談して頂戴よ」
「そんな問題が、あったかな」
「いやだわ、張り合いがないっちゃありアしない……」

と、細君が舌打ちをしたところへ、ドアが開いて、当人の龍馬が姿を現わした。

いい体をした、足の長い青年で、顔が締ってるのは母親似だが、眼鼻立ちの巨大なのは、父親譲りであろう。近頃の若い者には珍らしく、頭を坊主刈りにしているが、黒と赤のV字襟の白いスエーターを着てるところは、皇太子さんや、石原裕次郎と同様である。

「早くから、起されちゃったよ。なんか、用？」

と、文句をいいながらも、表情は屈托がなかった。

「ちっとも、早かないわよ。もう、十時よ」

母親は、編み物をやめた。

「ところが、今日は、休講があってね。朝寝は、予定のうちさ」

息子は、父親のそばに行って、ピースのカン入りから、一本抜き出した。両親に、〝お早よう〟のアイサツをすることを、母親は常に要求するが、彼はそれを怠って久しいのである。

「ゆんべ、ちょいと、飲み過ぎちゃってね」

「あんた、まだ学生だってことを、忘れないでね」

「学生だから、飲むんだよ。サラリー・マンになっちゃ、飲み代もあぶねえからな」

いうことがナマイキである代りに、まったく、日本人の日本語である。そこへいくと、父の天童の日本語は、注意深く聞く人には、発音の怪しいところがある。しかし、父親の方は、中国人と会っても、立派に、広東語をしゃべるが、龍馬は、全然、ダメである。彼は日本語だけしか、言語を持たない。従って、日本語で、ものごとを考える。自分の血液が、半分だけ日本人であることぐらいは知ってるが、気分的には、百割の日本青年なのである。

「何いってんの、まだ、お酒の味もわかりアしないくせに……。昨夜は、どんな連中と、一緒だった

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.